

けいじばん

○臨時活動日のご案内；8月4日：植物班臨時活動日、吉原先生を講師に植物観察を行います。9時40分森林館駐車場集合、14時ごろ解散の予定。弁当・図鑑類持参。班メンバー以外の参加歓迎。8月5日：きのこ班臨時活動日、10時森林館駐車場集合、弁当・あればカメラ持参。班メンバー以外の参加歓迎。

かつどうのきろく

7月17日（月曜日）曇後雨 参加会員22名

○安全確認；松本委員より夏期の水分補給や作業時に足場や周囲の安全を指差し呼称することなど注意事項の確認があり、長村委員長より雷時の対処法について説明。

○マダケ林保護網撤去；5月14日と6月18日に取り付けた保護網と支柱・梁を全員で撤去。5月と6月にそれぞれ半日で取り付けを行ったが、撤去作業は約1時間で終了。



（撤去作業もまた楽しい？）

（生き残った06年マダケ）

（竹柵破りの犯人は？）

○マダケ林保護策の結果のまとめ；保護網内に今年発生したタケノコのうち10本のマダケが生き残り、写真のように「2006年発生No.1」からNo.10まで10枚の札を取付けた。今年保護区域外に発生したタケノコは全滅、過去2年（04・05年）ともマダケ全滅の事実と併せ考えると、今年のマダケ林保護策には一定の成果を評価できる。なお6月活動日に保護網外に発生したタケノコ保護のため試行した竹囲い内のタケノコは3箇所とも食害で死滅。

マダケ林エリアを絞り込みすぎたことや、周囲で電気柵の設置が進んでいることも一因ではとの指摘や、食害しているのはシカだけでなくサル、ウサギ、タヌキまで可能性があるとの福島研究員の説明に、生物多様性の確保や人間活動と自然の共生の難しさを改めて実感した。いずれにせよ、保護網の設置・撤去の手間と効果、森林整備目標との整合性、共同活動参加への満足度など、幅広く議論を深める必要がある。

マダケ林保護について若干の思い

7月18日 坂本 彌

マダケ林保護に一部懐疑的な意見もあるが、そういう考えがあることに不思議はないと思います。県との協定もありますが、これも状況の変化に応じて変更があってもよいわけで、絶対的なものとは言えません。私も一旦は諦めていました。ただ、最近になって思うのは、タケノコ採取への欲求もありますが、より大きな意味は 獣害対策の試みではないかということです。竹での囲いに効果がなかったのは、猿によるものというのが素人には納得しやすいのですが、猿が本気で攻めてきたら天井のないネット柵では不十分と思われ、なかなか難問です。今年10本程度の新竹が得られましたが、発生数はどれほどだったのか。それは通常に比べてどうだったのか。樹木が多いが日照条件はタケノコの発生に対してどうなのか。等々。いくつかの疑問があります。来年度に向けて皆で検討したいと思います。

○物置改修作業（木工班ほか）；マダケ林防獣ネットの撤去にあたり、広場の物置を改修して収納スペースを確保しました。作業は次第に熱をおび、屋根はブルーシートながら切妻造りで内部も広く荷物の出し入れが快適になりました。汗を流して協力くださった木工班ほか多くの皆様、お疲れ様でした。

○シカ痕跡調査（シカ班ほか）；初めに長村氏が前回活動日に確認したシカ上陸地点と思われる祠山北東の湖岸へ。そこには湖から上陸したと思われるシカの足跡が確認できた。その後、北斜面を吊り橋下まで、南側のシイカシ萌芽林区域からホテイ岬を踏査。吊り橋下で2箇所、マダケ林近くで1箇所シカのフンを確認した。これ以外に祠山北側斜面とスタジイ林区域でフンを確認したという情報があった。



（上陸地点の足跡）



（この皮剥ぎ犯人は？）

食痕については、アオキの新芽に多く見られた。フンの量からするとシカは島内に生息しているのではなく、頻繁に対岸と行き来している可能性が高い。

○植物調査（植物班）；巨木林を中心に遊歩道および林内を観察した。ガンクビソウ(花)、ヤブレガサ(花)、オオバジャノヒゲ(花)、アキノタムラソウ(花)などを確認した。先月ホテイ岬で発見したコクランらしき植物と同じラン科の植物を巨木林でも発見した。なお6月18日マダケ林で確認したコクランの開花撮影のため、7月6日臨時活動を試みたが既に花期を終え開花写真撮影ができなかった。花の命は短くて・・・

○コナラ林更新調査；コナラ林更新は、萌芽更新、実生更新ともまったく先月と変化がなかった。更新面積400㎡に必要な次世代は多く見積もっても50本程度である。更新に不安が残る萌芽枝と数多く生存する実生苗をどう選択してどう組み合わせるのか、方向は一向に見えてこない。現実には教科書どおりでないことが実感できたのが収穫などといつまでもうそぶいているわけにもいかない。今後の選択肢(案)の検討を始める時期がきたと思われる。

○きのこ観察（きのこ班ほか）；この日の観察は雨が降り出したこともあり、途中で中断。こんな中で多くの人にきのこ探しの協力をいただきました。調査でクリーム色の傘とツボの大きさが同じ形の幼菌が見つかりました。カブラテングタケ；このきのこは東南アジア、沖縄、日本のシイ、カシ林、ブナ帯に発生し、自然の豊かさを特徴づけるきのこだそうです（7/17 千葉中央博吹春博士同定）。こんなきのこが千年の森に見られたことはうれしい限りです。他にもキアミアシイグチ、ヒロヒダタケと確定できないものも含め6種類、中央博で標本にして頂きました。7月8日臨時活動日に採取し標本にして頂いたテングタケ科、イグチ科を含めると、「千年の森」きのこ標本は既に20種類を超えました。8月5日のきのこ班臨時活動日はきのこ班のメンバーだけでなく、どなたでも歓迎です。千年の森で千葉県のきのこ図鑑（作成準備中）に載るような新種を探しましょう。

○カブトムシの巣立ち；落ち葉を集めて困った部分に多くのカブトムシの幼虫が発生していたが、今回の確認では、幼虫の姿は見えなかった。小豆粒大の大きな糞がびっしりとあった。多分大部分がすでに羽化して飛び立ったようである。落ち葉を集めて、来年はさらに多くの幼虫の発生を促し、羽化・成虫の発生を記録したい。千年の森アピールの大きな要素になるものと期待される。

トビの営巣観察記

H18-7-15 野鳥班 高橋忠友

4月1日にスタートしたトビの営巣観察も6月29日、二羽目のヒナの元気な巣立ちで終了しました。

巣立ち後も対岸の枯木の枝で、親鳥からエサをもらう幼鳥の姿が見られました。（写真左）

幼鳥は近くを上手に飛び回っています。巣の小枝で尾の先端がスリ減っています。（写真右）

豊英島に今年もまた新たな生命が引き継がれました。



①



②

（編集者注）巣立ち後も幼鳥が生まれ育った巣や巣の周辺の森や湖に遊びに来ているのを時々見かけます。